

大人との協働による思春期の居場所作りに参加した 7名のピアの変化とその要因

久佐賀 真理* 宮本 聖子** 田上 民子***
萩原 ひとみ**** 奥田 千枝子**** 名原 壽子*

要 旨

平成15年から開始した熊本県有明地域の町の保健室「イコイバ」は町の一角にあり、大人と若者が協働し、思春期の子ども達に出会いの場を提供すると共に、ワークショップや学習会を開き、情報や自分自身を見つめる機会を提供している。

この論文の目的は、イコイバ活動にピア・カウンセラーとして参加している7名の大学生の活動開始後半年間を振り返り、彼らの変化とその要因を活動との関連から明らかにし、思春期保健の方向性を考察する事である。

方法は、7人のピアの自己評価をもとにインタビューを行ない、活動後の変化項目と変化に影響を及ぼした要因、イコイバの特徴的な4つの活動領域との関連を明らかにした。

その結果、ピアの変化は、対自己に対する変化と対他者に対する変化に二分され、対自己に対する変化は、「自分を振り返る力」「疑問を持ち深く考える力」に、対他者に対する変化は「聴く力」「言う力」「出会いへの積極性」に見られた。それらの変化をもたらした要因には、「出会いと交流」「聴いてくれる雰囲気やルールのもとでの安心した語り合い」「心と心の深いつながり」が上げられた。活動領域別に見ると、専門職との協働は「出会いと交流」の機能を果たし、ピアが現在と未来を結びつけて考える機会を提供していた。ワークショップは「聴いてくれる雰囲気やルールのもとでの安心した語り合い」の機能を果たし、自分を見つめる時間と空間を提供していた。さらに高校生の相談活動は、ピアが学び発見した事を実践する場となっていた。

以上のことから、大人との協働による居場所作りは、ピアの内面を広げ、対人能力を変化させ、未来への方向性を考えさせる活動である事が示唆された。

キーワード：大人と若者の協働、居場所作り、ピア活動、対自己への変化、対他者への変化

1. はじめに

熊本県有明保健医療圏(以下有明地域とする)は熊本県の北部に位置し、二市八町を擁する人口18万人の地域で熊本市に次ぐ人口規模を有している。平成11年に管内に大学が新

設されてからは地域経済の活性化のもと、車道の整備や青少年が利用しやすい商店が増え、子ども達を取り囲む環境が変化している。そのような中で平成15年から始まった第4次保健医療計画は、最重点課題に思春期保健問

* 九州看護福祉大学看護福祉学部看護学科 ** 九州看護福祉大学研究科

***熊本県看護協会有明支部

****熊本県有明保健所

題を取り上げ取り組んでいる¹⁾。その主要事業の一つに、玉名市の駅前商店街の空き店舗を利用した常設の町の保健室「イコイバ」がある。この事業は今後もさらに進むと思われる少子高齢社会に向けて、将来を担う若者の心と身体を育てる地域づくりを目指して熊本県看護協会が始めたもので、平成15年度は日本看護協会から「町の保健室モデル事業」の指定を受けている。運営は行政を調整役に、保健師・看護師・助産師を含む地元看護協会会員有志と、看護福祉学科を持つK大学「ピア・カウンセリングサークル」の学生が協働で担っている。

思春期保健事業への若者の参加は、「健やか親子21」で厚生労働省も推奨しており²⁾、全国的に多くの地域が若者の参加を試みている^{3)~5)}。しかし、有明地域の活動は、他には見られないいくつかの特徴をもっている。一つは多くの地域が若者による移動型のピア・エデュケーション活動を主体にしている^{6)~8)}のに比較し、有明地域は誰でも出入り自由な常設の空間を活動の中心に据えている。前者を移動教室型とすれば、後者は定住居場所型とでも例えることができよう。平日の夕方から夜にかけて(16時~20時)毎日開室している。二つ目はその運営を大学生のみならず専門職が協働していることである。毎日1~2名の専門職と学生が当番で入り来室者の話し相手やその日の活動記録等日常の活動はもちろん、運営会議も合同で実施している。看護職者の中には親の立場を持つ者も多く、ピアと専門職と言う関係のみならず、親子の立場での交流も展開されている。

平成11年に出された青少年問題審議会答申は、21世紀の青少年育成に関する具体的提言の中で、青少年を育成する環境は地域一定エリア内での関係機関のまとまりの中で、青少年が多様な人間関係、自然体験、社会体験等

をする場を準備する事だと述べている⁹⁾。イコイバは若者たちにとってまさにこのような可能性を秘めた事業といえよう。常設の場の維持と立場の異なる者による協働事業は思考錯誤の繰り返しで、一定の形態が整うまでには時間もかかる。しかし、イコイバという一定の場所を地域の中に占めたことは、組織や世代を超えた者がそこで出会い、立場や意見の違いを超えて思春期問題を考える場が出来たことを意味する。

この論文では、活動に参加する18才~23才の大学生、大学院生(以下ピアとする)の活動開始後6ヶ月間の変化を整理し、大人と協働して思春期問題に取り組むピアの成長とその要因を明らかにした。彼らはスタッフであると同時に、思春期(10代)または思春期を終えたばかりの人達で、彼らの発言や変化を明らかにする事は思春期の問題の方向性を考えるきっかけになると思われる。

2. イコイバ活動の概要

イコイバは平成15年5月に始まった事業で、開室から半年間の歩みを表1に示した。登録ピアは約30名程いるが実習等でそれぞれのメンバーの活動量は異なり、核になるメンバー10名前後が中心となり活動している。ピア・カウンセラーになる資格は現時点では特になく、登録後日常活動の中でピア・カウンセラーとしての力をつけていけるシステムを模索している。そのために重視している事として、専門職との協働体験、ワークショップの企画・参加体験、高校生の相手をする日常活動体験、学習・研修会への参加体験の4つがある(以下この4つを活動領域とする)。

表1. イコイバ活動 一半年間の概要

日 時	活 動 状 況						備 考
	イコイバ関連活動	中高生 来所数	ピア 来所数	専門職 来所数	その他	来 所 者合計	
3月	3.19 町の保健室第1回準備会議						
4月	4. 9 保健所と大学生の話し合い						サークル部員4名参加。
	4.23 〃						〃
5月	5. 6 第1回合同スタッフ会議						部員3名参加
	5. 9 県知事と懇談	8	38	8	8	54	部員12名参加
	5.19 開 室						学生が担当できない時間帯を専門職が補う形で活動始まる。
6月	6. 3 第1回スタッフ勉強会						
	6.12 第2回スタッフ勉強会	27	115	16	36	194	
	6.25 第2回合同スタッフ会議						専門職の当番制開始、協働体制が始まる。
7月	7. 2 フリーマーケット						イコイバの宣伝企画。収益はイコイバ会計へ。
	7. 6 パーティー&ワークショップ (第1回) 「最近恋愛どう?」	15	53	30	25	123	学生企画の初ワークショップ
	7. 8 第3回スタッフ勉強会						
	7.15 第4回スタッフ勉強会						
8月	8.5~6 ワークショップ(第2回) 「ティーンエイジャーの集い」	26	53	33	45	157	保健所との合同企画・運営。参加者21名、ピア12名
	8.26 ワークショップ(第3回) 「音楽と語りの夕べ」						
9月	9.6~7 合 宿						
	9. 8 外部研修						5名参加(安積遊歩)
	9.20~21 外部研修	40	84	36	32	192	1名参加(居場所フォーラム)
	9.24 ワークショップ(第4回) 「エイズと私達の未来」						高校生2人のファシリテーター
	9.27 生き方の学習 学校イコイバ(第1回)						講師:金融広報アドバイザーテーマ「若者と多重債務」
10月	10.25~26 大学祭参加	37	103	59	24	223	大学祭で一部屋を借りてイコイバを設置

* イコイバ関連活動の概要

合同スタッフ会議 保健所を調整役に県看護協会役員、地元看護協会員、ピアが合同で開く運営会議(1回/2ヶ月)

スタッフ勉強会 ピアの意識を育成するために行った勉強会、9月以後学校イコイバと合体、外部研修も活用している。

ワークショップ 地域の若者や来室者を対象にピアが中心に企画運営する参加型の学習交流会(不定期)

学校イコイバ 試みで開始しているもので、地域の若者を対象に生きるために必要なスキルを学ぶ参加型の学習会
専門家が企画してピアと合同で運営する(不定期)

定例ピア会議 毎週金曜日、ピアのみでイコイバの運営を話し合う会議

イベント ピアが交流や遊びを目的に開くもの(フリーマーケット・合宿・パーティー等)

* 開室時間 毎週月～金曜日 夕方4時～8時

* 開室方法 専門職と学生のダブル当番制(調整は保健所)

3. 研究方法

今回の研究では調査を2回に分け実施した。1回目の調査はピアの変化とその要因を抽出するために、2回目の調査はそれぞれの変化が4つの活動領域のどれとより結びついているかを明らかにするために実施した。

1) 調査1「活動開始半年後のピア・カウンセラーの変化とその要因の抽出」

(1) 日時及び対象：平成15年9月25日に、承諾の得られた7名のピアを対象に実施した。

(2) 調査方法：5ヶ月間を振り返って活動がもたらした自己の変化を、「意識・認識・価値観」と「態度・行動」に分けて各自がカードに記入し（カード化）、グループ内で同じ意味のカードを集め島を作った（グルーピング化）。グループ内で話し合い各島に集められたカードを参考に、島に集められたピアの変化を20文字前後の文章で表現してもらった。全員で文章化した変化項目を確認した後、それらの変化を引き起こした要因を各自思いつくだけカード化し、同じようにグルーピング化して、文章化した（その結果導き出されたものを以後「変化の要因」とする）。

(3) 変化項目の分析：研究者3名で変化項目を、「対自分に対する変化」と「対他者に対する変化」の2項目に分け、さらに感情・態度・認識の3領域に分類した。

2) 調査2「変化項目と4つの活動領域の関連の明確化」

(1) 日時及び対象：平成15年11月25日～27日にかけて、活動当初から活動し承諾の得られた学生3名に面接調査を実施した。

(2) 調査方法：方法1で作成した変化項目(表2)と変化の要因(表3)を示し、その中で自分自身にも当てはまる項目を選び、あらかじめ準備しておいた4つの活動領域と時間軸を書いた図に選んだ項目を貼り、活動開始から10月までの自分自身の変化の関連図を作成してもらった。

(3) 関連図の確認と内容の分析：地図を見ながら変化のカードとその要因が4つの活動領域とどう関連しているか研究者が学生にインタビューしながら一緒に分析した。さらに日を改めて、研究者がまとめた関連図を学生に示し再度確認し修正した。

3) 倫理的配慮

調査1は、助成事業団体としての活動評価も兼ねて実施された。活動への地域社会の理解を得るために結果が公開されることはピアも了解している。調査1で特に配慮したことは、調査に参加するピアが自分達で活動の成果を確認し次の課題が見えるように、データーの抽出と内容の確認をその場で一緒に行なった。調査2の対象者には、事前に個人情報論文に掲載する許可を取り、面接結果の再確認が取れなかった学生1名の記録は今回資料から削除した。

4. 結果

1) 「活動開始半年後のピア・カウンセラーの変化とその要因」

調査の結果、16の変化項目(表2)と、9の変化の要因(表3)があげられた。

変化項目を2カテゴリー3領域で整理したものが表4である。対自分に対する変化で半数(4名)以上の者が上げた内容を見ると、感情領域より態度や認識領域に変化が多く見られた。特に多かったものは「自分を振り返

る力」、「疑問を持ち深く考える力」の変化であった。

対他者に対する変化では、どの領域にも半数以上の者が上げた項目が見られ、特に多かったのは「聴く力」「言う力」「出会いへの積極性」の変化であった。

そのような変化を起こした要因を見ると、最

も多かったのが「出会いと交流」で、その他半数以上の者が上げた項目として「聞いてくれる雰囲気やルールのもとでの安心した語り合い」「心と心の深いつながり」等があった。少数意見を見ると「自分を振り返る、見つめる時間と空間」「認められている実感」「人の優しさ」「知識」「感じる心」「笑顔」等があった。

表2. 活動参加によるピアの意識・認識・態度・行動の変化(発言数) N=7

<p>A 自分を振り返る力がついてきた (7)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 自分を振り返る自分がいることに気づいた 2 自分と向き合えていなかった自分に気づいた 3 自分について考えることができるようになった 4 少しづつ、自分と向き合うことができるようになった 5 自分と向き合うようになった 6 日々の振り返りを記録するようになった 7 自分の生き方を考えるようになった 	<p>G 心の痛みや押し殺してきた悩み・不安、自分が求めていたものが見えてきた (4)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 自分が気づかなかった 自分の痛み・心の傷に気づいた 2 私は話を聞いて欲しかったんだと気づいた 3 押し殺していた悩みや不安が見えてきた 4 居場所をほしがっていた自分に気づいた
<p>B 他人の話をゆっくり真剣に聴く力がついてきた (6)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 他人の話を真剣に聞くことができるようになった 2 人の話を聞けるようになった 3 少しづつ、自分ばかり話すのではなく聞くほうに回れるようになった 4 人の話をゆっくり聞くことができるようになった 5 人の話を聞くようになった 6 人の話が聞けるようになった 	<p>H 人を見る目が変わり、人を好きになり、人に対する信頼感が生まれてきた (4)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 以前は自分と違う考えや行動を冷たい目で見ていたような気がする。自分とは違う人間だから分り合えないと思っていたが人を見る目が変わってきた。 2 人(大人など)を好きになった 3 どんな人でも自分の思いを素直に伝えれば、わかってもらえるのではないかなと思うようになった。 4 人は誰でも、皆パワーを持っていることに気づいた
<p>C なぜと疑問を持ったり、物事を深く考えるようになった (6)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 なぜ?と少し考えるようになった 2 一つ一つの事に対して深く考えるようになった 3 人の話を深く考えるようになった 4 物事について深く考えるようになった 5 今まで当たり前だと思ったことがそうじゃないことに気づいた 6 深く考えることも。いろいろ・・・今まで気づかなかったことに対して気づくようになった 	<p>I 人の話を聞きたいと思うようになってきた (3)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 他人の話をすぐ聴きたいと思うようになった 2 人の話を聞くのが好きになった 3 親と話すようになった
<p>D 他者に対して、自分の思いや意見を言えるようになってきた (5)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 自分の思いを言えるようになった 2 人前に立てるようになった 3 手を上げて自分の意見、話が少しできるようになった 4 自分の考えや思いを少しづつだけ語れるようになった 5 私はよく語るようになった 	<p>J 涙がよく出るようになった (3)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 涙もろくなった 2 涙がよく出るようになった 3 涙もろい自分に気づいた
<p>E 出会いの大切さがわかり、人と出会うことに積極的になってきた (5)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 出会いが素敵に感じるようになった 2 人との出会いが大切だということがわかった 3 苦手だった人との出会いが最近では楽しくて好きになった 4 沢山のひととの出会いがあって、沢山の考えがあるということを改めて気づいた 5 人との出会いに積極的になった 	<p>K 色々な人と話すのが楽しくなってきた (2)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 色々な人と話すことが少し楽しくなった 2 高校生と話すのが楽しくなった
<p>F 自分の考えや表現能力の不足に気づいてきた (5)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 今まで人見知りだと思っていたけど実はそうではなく、人前で発表するのが苦手なんだと気づいた 2 自分の思いを言葉で表現することが下手な事に改めて気づいた 3 考える力が無い事に気づいた。(深く一つの事を考える事が無かった。周りから言われる事をしていたから、考える必要が無かった。) 4 自分の発言に気を付けるようになった 5 自分の意見や考えを持っていない事に気づいた 	<p>L 心に敏感になってきた (2)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 心を大切にするようになった 2 自分の心が変わった
	<p>M 自分を好きになってきた (2)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 自分のことが嫌いじゃなく、好きになろうとしている(何か変わったかも) 2 自分を好きになれる気がしてきた
	<p>N 他人の話に共感するようになってきた (2)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 他人の話に自然に共感している自分に気づいた 2 人の話を聞いて、共感する心を持つようになった
	<p>O 自分の存在が自分の中で膨らんできた (1)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 私が膨らんできて、私が私になった
	<p>P メンバー勧誘など、他者への働きかけができるようになってきた (1)</p> <ol style="list-style-type: none"> 1 新メンバーの勧誘ができる

表3. ピアが変化した要因

I 出会いと交流 (10カード)		III 心と心の深いつながり (4カード)	
1	これまで接してきた人々から刺激やパワーをもらっているから	1	人の心と心がつながりあうこと
2	ピアのパワーのすごさ!!	2	人と人との深いつながり
3	世代に変化なく人の意見が聞けて、自分の考えと照らしあわすというか、色々な考えがあることに気づいたから	3	人の変化が人の心が少しずつ何か見えなくても変化させてきているのではない
4	イコイバに関わらなかつたら出会わなかつたであろう人々との出会い	4	人の心
5	人との出会いの場所。チャンス	IV 自分を振り返る・見つめる時間と空間 (2カード)	
6	人との出会い	1	自分自身を振り返る場になっているから
7	色々な人と出会える機会	2	自分を見つめる時間
8	人との出会い	V 認められている実感 (1カード)	
9	イコイバを通じて本当に大人と私たち世代の人たちが話したり語ったりできる	1	認められている・・・私は私でいいという実感
10	今までにない、色々な立場の人がひとつの場所に集まるということ「居場所」	VI 人のやさしさ (1カード)	
II 聞いてくれる雰囲気やルールのもとでの安心した語りあい (5カード)		1	人のやさしさ
1	「誰も自分のことを人には話さない。自分の意見を否定されない」というルールのもとで“語る”という体験	VII 知識 (1カード)	
2	周りの人たちが話を聞いてくれる雰囲気を作ってくれているので、話を聞いて欲しかった自分に気づくことができたし、また話せるようになった	1	様々な知識を得ることができたこと
3	人と会話することでその人を理解し、本来人はやさしく、自分を受け入れてくれるのだと思うから	VIII 感じる心 (1カード)	
4	自分を客観視できるようになることで自分を知り、それを言葉で他者に伝えられるようになる	1	とにかく感じる心
5	人と話をかわし、意見や思いを聞く機会が多くなること	IX 笑顔 (1カード)	
		1	笑顔

表4. 活動によるピアの変化(発言数) N=7

	対自分に対する変化	対他者に対する変化
感情	I. 自分を好きになってきた (2)	H. 人を見る目が変わり、人を好きになり、人に対する信頼感が生まれてきた (4)
	J. 涙が良く出るようになってきた (3)	K. 人の話を聞きたいと思うようになってきた (2)
		M. 色々な人と話すのが楽しくなってきた (3)
態度	A. 自分を振り返る力がついてきた (7)	B. 他人の話をゆっくり真剣に聴く力がついてきた (6)
	C. 「なぜ」と疑問をもったり、物事を深く考えるようになった (6)	D. 他者に対して自分の意見や思いを言えるようになってきた (5)
	L. 心に敏感になってきた (2)	E. 出会いの大切さがわかり、人と出会う (2)
		N. 他人の話に共感するようになってきた (2)
		P. メンバー勧誘など、他者への働きかけができるようになってきた (1)
認識	G. 心の痛みや押し殺してきた悩み、不安、自分が求めていたものが見えてきた (4)	H. 人を見る目が変わり、人を好きになり、ひとに対する信頼感が生まれてきた (再掲) (4)
	F. 自分の考えや表現能力の不足に気づいてきた (5)	E. 出会いの大切さがわかり、人と出会う事に積極的になってきた (最掲5)
	O. 自分の存在が自分の中で膨らんできた (1)	

2) 「変化項目と4つの活動領域の関連」
調査協力の得られた事例1 (23才、活動暦6ヶ月)、事例2 (21才、活動暦6ヶ月)の変化を図1、図2に示した。関連図について2人

が説明した内容は以下の通りである。4つの活動領域毎に報告する。(アルファベットは表2のカード番号を示す)

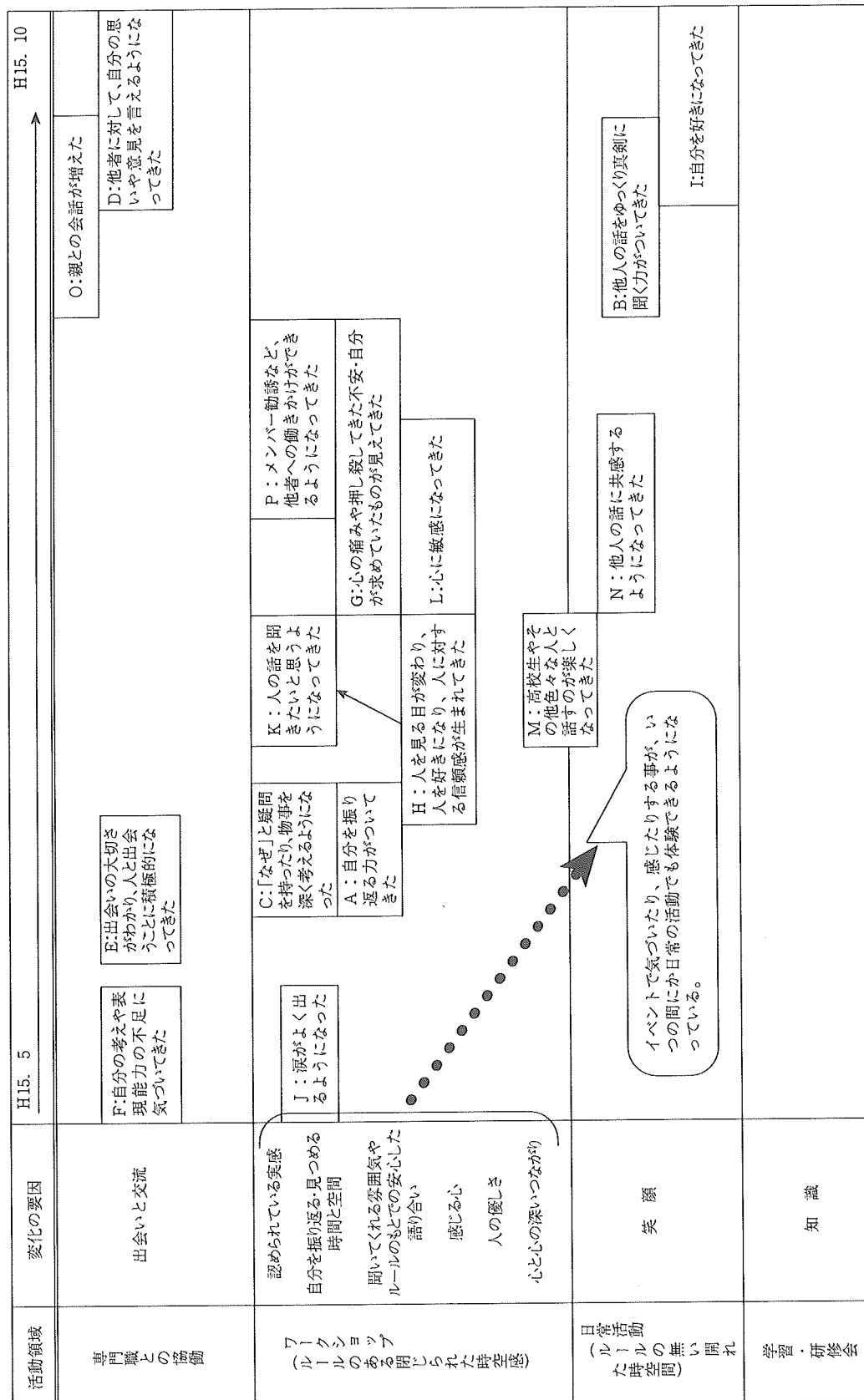


図1 活動開始後のピアの変化(事例1)

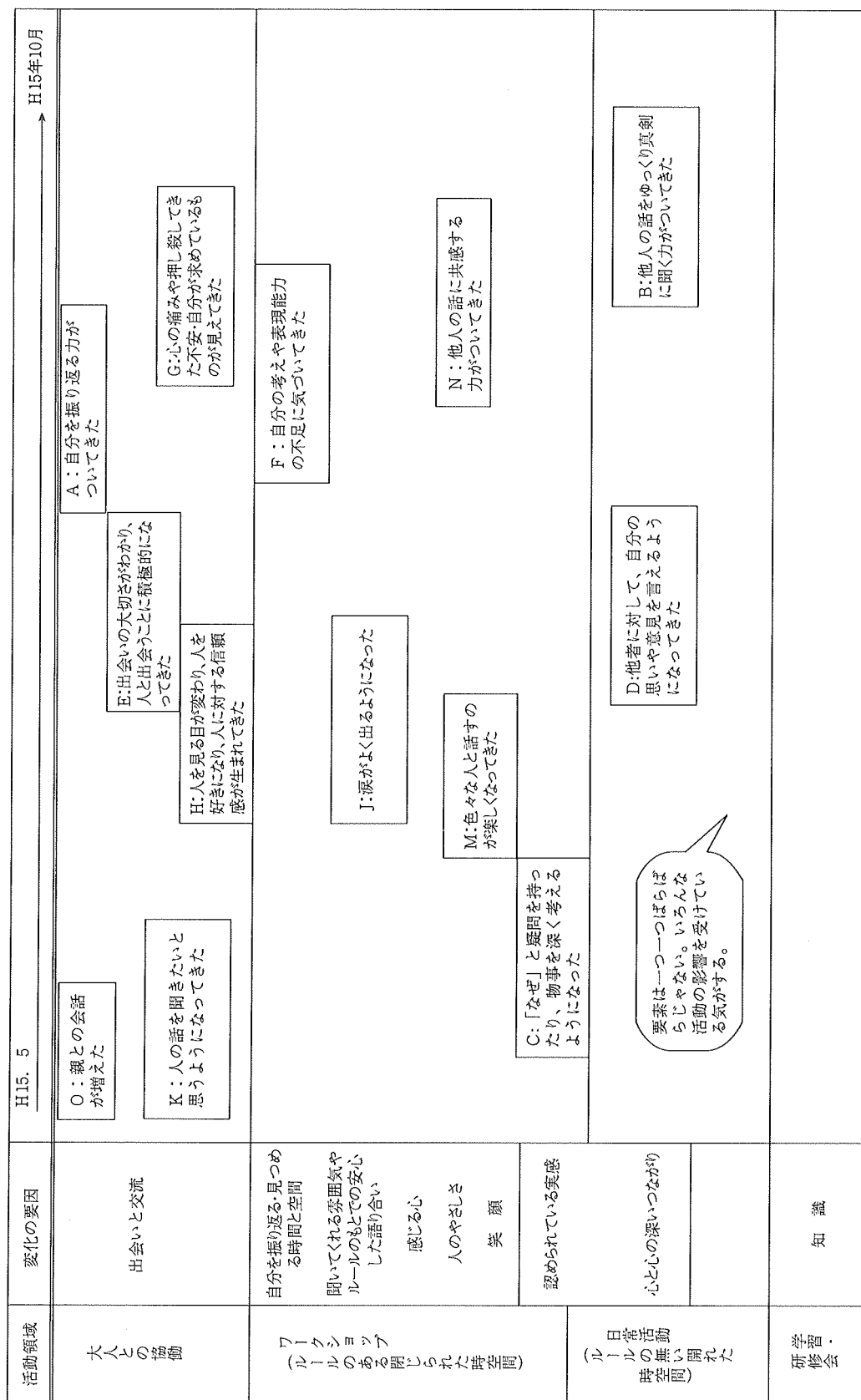


図2 活動開始後の変化(事例2)

(1) 専門職との協働がもたらした変化 ＜事例1の変化＞

事例1にとって専門職との協働は、「出会いと交流」という要素を持っていた。そしてその体験の影響は、親や他者に対して積極的に出会いを作ったり、自分の意見が言えるようになるなどの形で広がっていた。

F：「自分の考えや表現能力の不足」は、同じ立場の者同志でいる時は感じなかった。大人と協働で活動しだして、いろんな背景や立場の人と話すことで気づいた。

E：いろんな人と出会って話す事で、学びが沢山あることに気づいてきた。自分が成長できると思うから、出会いは大切だと思うし、出会いに積極的になってきた。

O：大人と話す事で、親が子をどんな風に見ているのかわかるし、もしかしたら親も自分と話したいニーズを持っているのかもしれないと思うようになった。今までは親とは必要な時に話せばいいと思っていたが、イコイバで語ることで分かり合えるということを実感できたし、これは親子でも同じなんだと思えた。

D：いろんな世代の人と多く接するので、いろんな体験をする事で自分の思いが確立され、それを人に言えるようになってきた。

＜事例2の変化＞

事例2にとっても専門職との協働は、事例1同様、「出会いと交流」という要素を持っていた。その結果、親や他者との関係の深まりや広がり、人への信頼、視野の広がりが生まれ、将来について考える等の変化が起こっていた。

O：親との会話は以前からあったが、この活動をするようになっていっそう増えてきた。

k：人の話を聴くのは以前から好きだったが、この活動で専門職や大人の人の話を聞くようになって「これは面白い」と思うようになった。自分が経験していない事や昔の思い出話、後悔していること…等。

色々な話を聴く事でその人と近づいた気持ちになれ安心する。

H：話す事で自分が今までもっていたイメージが変わる、保健所の人と話が通じない時期があったけど、話し合った事で協力し合えることが確認できた。

E：イコイバができてから自分の考え方、人間関係が変化し、気づきが出てきた。以前は一方向からしか見れなかったのが、色々な方向で見れるようになって心に余裕が出てきた。

A：婦長のTさんに「なぜこの仕事についたのか?」と聞いたとき、「大変な時もあったけど…」といいながら嬉しそうに話すのを見て、誇りに思える仕事っていいなって思った。それから、自分は今までこうしてきたけど、自分のやりたい事って何だろうと考えるようになった。いろんなことに自分はどうかのかと考えるようになった。

G：私にとっての不安は就職の事が一番だった。まだまだ先だから別の所に置いていたが、専門職の話を聞くことで考えなくてはいけないと思うようになった。福祉職のHさんの話を聞くことは楽しみ。

2) ワークショップがもたらした変化 ＜事例1の変化＞

事例1にとってのワークショップは、「自分を振り返り見つめる事のできる時間と空間」で、聞いてくれる雰囲気やルールがあるため「安心した語り合いができる場」になっていた。そこは「やさしさ」や「認められている実感」、参加者同志の「心と心の深いつながり」を感じる場でもあった。その中で事例1は涙を流し、深く考えることを覚え、人への信頼感や話を聴きたいという欲求が生まれ、新たな自分発見へとつながっていった。さらに高校生との関係も楽しくなり、この活動に他者を勧誘したいという思いにいたっていた。

J：「涙」がよくでるようになったが、それは人のつらかった事、問題として持っていることを聞いた時に出る。イコイバではいろんな話を聴くから。親世

代の人の意見を聞くと、親のことが考えられるようになってきて、その時も涙が出た。

D：ワークで考えることを知ったので、日常生活の中でもできるようになってきた。それはイコイバというゆっくりした時間の中だからできたと思う。今は、ゆっくりした時間を意識して設けようと思うようになった。

H：ルールやテーマがあるワークショップで人の話を聴くうちに、「どんな人でもつらい事を経験し今にいたるし、最初から嫌な人はおらず、今までの体験や育った環境の中で変わってきたんだ」と思うと、人をいとおしく思うようになった。

K：「この人はどういう人生を生きて、どんな考えをもっているのだろうか？」と、人自体やその人自身に興味を持つようになった。それから人の話を聴くのが楽しくなり、聴きたいという欲求もでてきた。

G：語る・聴くを繰り返してきたからこそ自分を振り返れるようになって、深い気持ちが見えてきた。

P：この活動は、自分が楽しい。聴く事がいろんな成長につながる。つらい悩みを持っている人は特に勧誘したい。いろんな立場の人と働くことで学ぶことが多い。同じ専門職を目指す学生には勧めたい。自分の必要性が見出せない人（なにもする事が無い人、生きがいが無い人）には、イコイバでは必要とされる事を伝えたい。

<事例2の変化>

事例2にとってのワークショップは、事例1同様「自分を振り返り見つめる事ができる時間と空間」であり「聞いてくれる雰囲気やルールのある安心した語り合いの場」であった。「感じる心」「人のやさしさ」「みとめられている実感」「心と心の深いつながり」も同様に感じていた。事例2に起こった変化も事例1同様で、物事を深く考えるようになったり、涙をよく流すようになっていた。高校生との関係も糸口が見えてきて前向きになっていた。事例1が大人との関係の中で感じた表現能力の不足を、事例2はワークショップの

中で感じていた。

C：この活動が始まった頃はばたばたで、実習も重なっていたので疑問をもったりすることは無かった。でも8月2日のワークショップがきっかけで「なぜ」という疑問を持つ事を覚えた。

M：高校生と話す時、最初は話題をいろいろ考えて緊張し、楽しむどころでは無かったが、テレビや芸能人の話から入ってもいいという事がわかってから、恋の話もできるようになって楽しくなった。

J：ワークショップやおならタイプ（毎週1回、10月から開始した語りの会で、ナラティブからヒントを得て付けられた）で、みんないろいろ持っているんだということがわかってから一人だけがつらいのではなく、それぞれ何かを考え受け止めながら生きているんだと改めて実感した。ずっと話してきた中で「ここでは話しても大丈夫」と感じるようになってから、泣いていいんだと思うようになった。

F：自分の感じている部分を言葉に表現して相手に伝える事は、なかなかできないことだと感じるようになった。また、伝えるために自分と向き合い自分と話さなければいけない事に気づいた。自分の短所をどうしたらカバーし補えるかを考えるようになり、実践に移そうとしている。

M：共感や受容とは何かがまだわからない。うなづく事？聞くこと？その人の立場にたって聞くこと？、まだよくわからない。でも自分が話す時の事を考えると、あいずちがあるだけでも話しやすい。あいずちを共感と捉えようと、自然とゆっくりできるようになっている。

（3）高校生等他の来所者との交流(日常活動)がもたらした変化

<事例1の変化>

事例1にとっての高校生との交流は笑顔をイメージする場であった。その中で事例1は、他人の話に共感する力やゆっくり真剣に聴く力がついてきたことを感じていた。事例1にとってのワークショップと日常活動の関連は、ワークショップで新しい事を学び発見し、

日常活動の中でそれを実践するという図式になっていた。

M: イコイバは毎日開いていて、いろんな人が出入りする。そんな環境があるからそこへ行って話す事が楽しくなってきた。話したいし聞きたい。

N: 聴く機会が多いからこそ共感する力がついてきた。訓練になっていると思う。

B: イコイバというゆっくり語れる場があるから、そこに行くし話を聞く機会も増えた。どんな事が傾聴になるのか等考えながら聴くようになった。

I: ワークなどを経験することで振り返ったり、自分を客観的に見ることも少しづつ行っていけるようになり、自分を冷静に分析するようになってきた。

<事例2の変化>

事例2にとっての高校生等来所者との交流は、認められている実感や心と心の深いつながりを感じる場であった。その中で事例2は、他者に対して自分の意見を言えるようになったり、他人の話を聞く力がついてきたと感じていた。

D: 今まで自分の気持ちなど言わなかったが、10月頃から言っていると思えるようになってきた。きっかけは実習が終わりみんなと話す時間ができた時、みんなが家のことなんかを話すのを聞いて。全てではないけれど言ってもいいと思える事が出てきた。

B: イコイバがきっかけになって、イコイバの外でも友人とじっくり話せるようになった。

(4) 学習・研修活動がもたらした変化

<事例1の変化>

事例1は、ピア・カウンセリングや居場所作りに関する外部研修に参加し、文献学習等で自己学習を展開していた。しかし、そのことがもたらした変化は特にあげられなかった。

<事例2の変化>

事例2は、前期に行っていた学習会をあげた。事例2はそこでの知らなかったことが知れる楽しさを報告したが、変化のカードは特

にあげられなかった。

5. 考 察

半年間のピア活動によるピアの変化から明らかになったことは、この活動が「対自分に対する変化」と「対他者に対する変化」をピアにもたらしたことだ。対自分に対する変化で多かったものは、「振り返る力」「疑問を持ち深く考える力」であった。このように自己に注意が向かっている状態をフェニグステインは自己意識(自意識)といい、特に自己の内的感情や思考への関心を私的自意識と名付けている¹⁰⁾。人が事態や時間を超えて態度を一貫するには、日頃から自分なりの意見や態度を自分の中で明確にしておく必要があり、私的自意識の高い人は自己の内面に注意を向けやすいので一貫した態度が期待できるといわれている¹¹⁾。よって、今回のピアが変化として上げた「振り返る力」や「疑問を持ち深く考える力」の向上は、氾濫する情報や他者の意見に流されない一貫した態度の育成に役立つと思われる。

それでは何が私的自意識の育成に役立ったかを2名のピアのインタビューから見ると、「振り返る力」や「疑問を持ち深く考える力」は、ワークショップや大人との協働の中で磨かれていた。特にワークショップは面接調査をした2人の中で、「自分を振り返り見つめる時間と空間」として位置付けられていた。シャイアーらは聴き手のアイコンタクトが、話し手に他者の存在を明確に意識させ自己意識を活性化させることを報告しているが³⁾¹²⁾、ワークショップは聴き手のルールとして、否定しないでうなずきながら温かなまなざしで聴くことをルールにしているため、そのことが彼らの私的自意識を高めた可能性がある。また、秘密保持を原則に時間を決めてお互いに話をするため、ワークショップの中のテー

マに対する自分の意見や感情が他者と比較して明確になり、疑問が出たり深く考えたりするものと思われる。自己開示はカタルシス機能にとどまらず自己明確化の機能を持つといわれるが¹³⁾、ワークショップでは自分一人が自己開示するのではなく2人で行ったりグループで行ったりするため、自己を開示しやすく、その繰り返しで態度を形成していくと思われる。事例1の「語る・聴くを繰り返したからこそ自分を振り返れるようになって深い気持ちが見えてきた」という発言が示す通り、ルールを決めて時間を分かち合い語る・聴くを行うワークショップ体験は、若者の私的自意識を育成するために有効な方法と言える。

対他者の変化を見ると、感情・態度・認識とも他者との関係を築く上で前向きな変化があげられていた。具体的には「聴く力」「意見や思いを言う力」「出会いへの積極的態度」等の変化である。面接をした二人を見ると、それらの力はいずれも専門職との協働、高校生との日常活動の中で磨かれており、専門職との協働の特徴としてあげられた「出会いと交流」は、ピアの変化を引き起こした最も大きな要因であった。専門職との出会いと交流がもたらしたものは、「自分の考えや表現能力の不足」「学び、成長できるという実感」「自分の経験していないこと」等が上げられ、それは同年代の中では得られなかった現在と未来を結びつけて自分を考える機会の提供をしていたと思われる。田中は、子ども・若者の居場所を「他者とのかわりの中で自分の位置と将来の方向性を確認できる場」¹⁴⁾と定義しているが、ピアがイコイバ活動に積極的に参加する背景に専門職の存在が大きな位置を占めていることが伺える。

2人にとっての高校生との日常活動を見ると、学習や発見したことを実践したり、頭で

理解したことを実体験する場として位置づけていることがわかった。事例1は「ワークショップで感じた事を実践する場所」「どんなことが傾聴になるか等考えながら聞いている」と述べており、事例2も「言わなかったことを言うようになってきた」と述べていた。2人の発言から、彼らが他人の話をゆっくり真剣に聴いたり、自己を開示することを学びつつあることが伺えた。ピアの姿勢はイコイバが高校生達の居場所になるための重要な条件である。年齢が近ければピアかという決断してそうではない。自分の思春期と今の自分自身とを十分に振り返る力を持ち高校生が抱える問題に心から共感してこそ始めてピアといえよう。それは教えられてできるものではなく、知識と体験を結びつけながら私的自意識を深めていく過程の中で身に着いていくものと思われる。

イコイバ活動の深まりとともに高校生が抱える問題は今後少しずつ表面化してくると思われるが、ピアがどのように思春期の子ども達の成長を支えていくか、そのために専門職はどのような環境を整え支援するかは常に省察していく必要がある。そのためには、ピアが専門職との関わりの中で自分の未来と現在の位置を確認しているように、高校生はどのような変化を起こし、そこにピアがどのような役割を果たしたかを明らかにする必要がある。次の課題としたい。

学習・研修活動は、知識を入れる場にはなっていたが変化カードは見られなかった。薬物・性感染症の拡大のみならず、思春期の子ども達を取り囲む社会、巻き込まれやすい問題は多岐に渡っている。イコイバがどのような若者をも受け入れていくためには、社会で起こっている問題の情報提供や学習の機会を積極的に行っていくことは大人側の課題と思われる。

6. 結 論

看護専門職との協働による思春期の若者のための居場所作りに参加した7名のピアの、活動開始半年間の変化とその要因を、4つの活動領域との関連から明らかにした。その結果、以下の事が明らかになった。

- 1) ピアの変化は対自己に対する変化と対他者に対する変化に分けられた。
- 2) 対自己に対する変化は「自分を振り返る力」「疑問を持ち深く考える力」に、対他者に対する変化は「聴く力」「言う力」「出会いへの積極性」に見られた。
- 3) それらの変化をもたらした要因で多かったものは、「出会いと交流」「聴いてくれる雰囲気やルールのもとでの安心した語り合い」「心と心の深いつながり」であった。
- 4) 活動領域別に見ると、専門職との協働はピアが現在と未来を結びつけて考える機会として、ワークショップはピアが自分を見つめる時間と空間として、高校生との日常活動は、学び発見した事を実践する場として作用していた。
- 5) 以上のことから、イコイバのピアが活動がもたらす「自分を振り返る時空間」や「大人との出会いと交流」「学びと実践する機会の提供」は、若者の内面を広げ、対人能力を変化させ、未来への方向性を確認できる活動である事が示唆された。

引用文献

- 1) 熊本県健康福祉部地域医療推進課、有明地域保健医療計画、熊本県、平成15年
- 2) 健やか親子21検討会報告書、hyyp://www1.mhlw.go.jp/topics/sukoyaka/tp1117-1_c_18.html
- 3) 家族と健康、平成15年4月号、日本家族計画協会若者委員会U-COMおよび京都モラル・ドーナツの活動が報告されている。
- 4) 家族と健康、平成15年8月号、栃木県のピア・

カウンセリング活動が報告されている。

- 5) 家族と健康、平成15年10月号、全国でピア・カウンセリングを展開し、組織しようとしている人たちの研修報告がされている。
- 6) 中曽根正、地域における思春期保健、思春期学、19(1):58-63(2001)
- 7) 芥川治樹、ピア・カウンセリングを応用したエイズ予防教育の試み、日本公衆衛生雑誌、50(10):592(2003)
- 8) 岩崎栄、エイズピア・エデュケーションの全国展開のシステム構築に関する研究、厚生科学研究費補助金研究班分担研究報告書、2002
- 9) 生涯学習・社会教育行政研究会編、生涯学習・社会教育行政必携(平成14年版)、P1049、第一法規:東京、平成13年
- 10) 斎藤勇編、対人社会心理学重要研究集6、P9-11 誠信書房:東京、平成10年
- 11) 再掲10) P15
- 12) 再掲10) P11
- 13) 再掲10) P122
- 14) 田中治彦編、子ども・若者の居場所の構想、P8、学陽書房、2001

参考文献

- 1) 堀洋道、山本真理子、松井豊、心理尺度ファイル、垣内出版1994
- 2) 藤永 保編、現代の発達心理学、有斐閣、1992
- 3) 家族計画国際協力財団日本語版作成、世界人口白書2003、
- 4) 青少年教育指導者の手引き、大阪府青年の家、平成12年
- 5) Youth Empowerment実行委員会編、POWER of the Youth～若者の参画がNPO活動に必要である理由、Power～市民の力～、2001

Seven Peers' Change and its Factors In Youth Gathering Space Building Supported by Adults

**Mari KUSAGA Seiko MIYAMOTO Tamiko TANOUE
Hitomi HAGIWARA Chieko YODA Hisako NAHARA**

Abstract

Ikoiba, a youth health center, located in down town of the Ariake area in Kumamoto Prefecture, has been offering a free space for the adolescents since 2003, where they can meet people, or sometimes participate in workshops and study meeting to get useful information and to raise self-awareness.

This paper aims to analyze the past six month activities of seven students as peer counselors in Ikoiba and to clarify the relationship between their changes and its factors, and to get perspectives about the future health promotion for the adolescents.

Through the interview survey using cards about each peer's self-evaluation, it was clarified how four specific function areas of Ikoiba relate to the peer students' changes and its factors.

As a result, their changes were categorized into two types; one is intractive change against themselves, and the other is interactive change against other people. The former includes self-reflection skill and critical thinking skill and the latter includes listening skill, expressing skill and the positive attitude to meet other people. The factors of such changes are thought to be "meeting and exchanging", "talking together under the safe atmosphere with the rules of listening" "deep communication from the heart" .

Co-operation with the nurses made Ikoiba a space for meeting and exchanging, and facilitated peers to think of their present and their future. Workshops functioned as an opportunity to talk together without fear under a safe atmosphere with rules of listening. It also offered them time and space to raise self-awareness. Counseling activity for the senior high students became an opportunity for the peers to put into action what they already learned and found in Ikoiba.

Such results suggest us that youth gathering space building in cooperation with adults facilitated peers to expand their inner mind, grow their human relationship building skill and to think of their future life.

Key words: cooperation with youth and adult, established for the gathering place, peer counseling, changing for themselves and changing for others.